

794
 東日本大震災の被災地で、京都の葬儀業者が全日本葬祭業協同組合連合会のボランティアとして、納棺などを拍っている。安置所に並ぶ数え切れない遺体。でも、一人一人の死と遺族の心に寄り添う用いを続けた。

安置所に数え切れない遺体 それぞれに悲しみある

一人一人の死 寄り添う弔い

375、412、464 膨張した顔。ドライアイ……。手書きの番号札がひすをひつぎに詰め、2人つきに張ってあった。津1組で遺体を繰り返し運ばされた宮城東松さんだ。

島市の遺体安置所。京都 普段なら風呂で体を清市中京区の葬祭業者九谷 ぬ、費用した服を着せる。田橋司さん(37)は3月24日だが十分な水も衣類がない日、納棺を手伝った。「さく、できなかった。遺族さままな人の死が一緒く、と対面するまでに顔をふたにであった。でも、それき、髪形を整えることすそれに悲しみがある。」

ひつぎの脇に、納棺後 災の光景と150体余りに包まれた遺体が並ぶ。の遺体を前に動揺してい身元が分からない、檢視が間に合わない、納棺で大きな遺体だ。安置所にと孫のひつぎが隣同士に足音と泣き声が響いてい置かれていた。「火葬を待つ間、せめてそばに遺体は泥を洗い落とさせさせて」と別の安置所から孫が運ばれてきたと聞両目。おぼれたせいか、いた。



遺族と亡き人 車中が初めての水入らずの時間

中京区の葬儀社に勤める安井恒人さん(41)は、福島県相馬市の遺体安置所から火葬場までひつぎを運ぶ車の運転手を務めた。

子どもの遺体を乗せた。片道2時間、後部座席の母親は隣のひつぎにしがみついたままだった。助手席の祖父は「未来があった。代わってやりたい」と泣き続けた。父親は行方不明だった。安置所は家族の行方を捜す人が絶えない。張り出された遺体の顔写真を確認し、ひつぎの中を次々とのぞき込む。同じ境遇の人をそばに、家族と対面できても悲嘆も安堵もできない。「火葬場へ向かう車中が、遺族が亡き人と初めて過ごす水入らずの時間のように思えた」。

妻を亡くした高齢の男性は乗車して30分、語り続けた。「守ってきたものが全部流された」「どうしたらいいか」。安井さんは励ました。「奥さんの分まで生きてあげないと。上から見てはりますよ」。男性は涙を流した後、眠りに落ちた。

全日本葬祭業協同組合連合会はボランティアを送り続ける方針だ。松井昭憲会長(68)は「状況は厳しいが、精いっぱい弔いの弔いに力を尽くす」と語る。

(本田貴信)

ひつぎが並ぶ臨時の遺体安置所。置かれた骨うばは身元が判明し、火葬を待っている印という福島県(相馬市)。